



NETから東日本放送
テレビ界での46年は
私の全人生

私の放送人生

第10回

元東日本放送(khb)
水上 健治氏

自動車メーカーの内定を蹴り

NETに入社

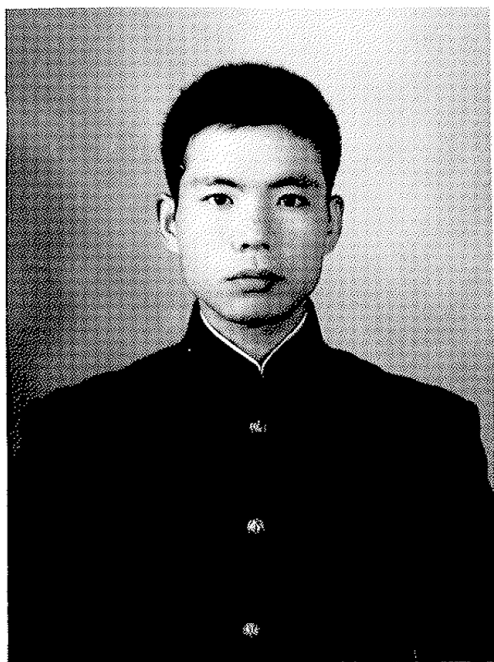
力道山と木村政彦の凄惨な一騎打ち、金田正一投手と長嶋茂雄選手の白昼の対決、正田美智子さんの初々しい会見記、嵐寛寿郎の鞍馬天狗、高田の馬場決闘シーンを思い出させる洋画「アンタツチャブル」、フランキー堺が演じる「私は貝になりたい」、妖艶な深夜の「エイト・ピーチエス・ショー」などなど、高校生時代から大学生時代に、街角の電器店や合宿所の食堂で見たテレビ映像の忘れられない数々のシーン。自宅にはテレビ受像機はもちろん、電話機さえ無かった頃の話です。

「戦後は終わった」と池田勇人内閣の所得倍増政策のもと、好景気を謳歌していた昭和36年、大学4年生の就職活動は売り手市場で、秋にはある大手自動車メーカーに内定していました。

呑気に学内の就職募集の案内看板を眺めていた時、「日本教育テレビ(NET)」の募集要項を見つけ、暫し考え込んでしまいました。

テレビの普及台数は一千万台を突破する勢いと報じられており、将来の発展は充分感じられます。どんなものかと学生課に相談に行つたところ「民間放送の先はまだまだ見えない」と云われ、応募を諦めかけました。しかし「何か違うぞ」と思い返し、応募することになりました。

あの威風堂々とした自動車メーカーのビルに比べ、周囲の緑に溶け込みそうな佇まいにホッとして正面玄関を入り、受付の方に来意を告げました。親切に対応してもらい、無事、願書提出ができました。テレビ局には綺麗な方が居るなあと感じたのが、この局の第一印象でした。後に判った事です。が受付の山田ゆみ子さんでした。はじめにポーツとして後はショボンでした。



昭和36年 大学4年時
入社願書用の写真

その後、中央大学の神田校舎で一次テスト、本社会議室で、当時の大川博社長はじめ数人の方々の面接試験を受けました。社長は東映フライヤーズのオーナーを務められており、大学で野球部員だった小生にいろいろ話しかけられ、詳しくは覚えていませんが「ふーん！ 4年間2軍か3軍だったのかあ」と云われたことを記憶しています。

面接の数日後、自宅に電報で入社内定の通知が来ました。電文は次のようなものです。

「ニューシヤナイテイス、
○ヒ○ジョイデコウ」NET
テレビも電話もない我が家への



昭和40年 制作局時代、実行予算の点検作業中

制作現場で予算管理

スタッフに睨み返される

胸躍らせる小生への初辞令は、

最も早い連絡手段だったのです。それから数カ月後、心配していた学校の単位取得も成り、晴れてNETの第5期生として入社式に参加しました。因みに、今年度(22年度)は第65期生です。

経理局経理部主計課でした。商学部出身であつたため、予想はしていたものの、テレビ局勤務とはちよつと掛け離れた感がありました。以後定年まで46年間の数字との付き合いの始まりでした。母に辞令を見せると、テレビと経理部門の結び付きが理解できず目を白黒させていました。

主計課は放送される全番組の費用実績を個別に集計し、予算の適正な運用がなされているかを確認していました。配属当初は深い部分には立ち入ることはできず、部門別の番組名の把握と、それぞれのタクシー代使用料の集計が日課でした。肅々と静かな雰囲気

の経理局はテレビの華やかな印象とは全く異なる世界でした。

そして2年後、異動があり、念願の現場勤務が発令され

ました。新設の制作局庶務課です。スタジオ制作番組を間近に見て、そこで働くスタッフと一緒にそれぞれの番組の実行予算書を作成していくのです。

現場の演出家やスタッフの中には、金銭感覚の欠如、無頓着な方々も多々見られ、「金なんてどうにでもなるさ! 俺は良い作品を作るだけだ!」と豪語する方々を宥めすかし、時には怖面を持って協力してもらう事に苦

労したものです。

スタジオドラマは生本番でした。若いAD(助手)の方々と親しくなり、制作上の雑用を手伝う事もありました。北大路欣也さんのテレビドラマ初出演「徳川家康」。河野宏さん演出で、馬をスタジオに入れることになり土砂



昭和42年 NETラグビー部での一コマ、
対防衛庁OB戦でFWとして活躍(右から2人目)

を運び入れたところ、照明の熱で土がパサパサになり、素足で水を撒く作業を手伝わされました。本番中、変な音はたてられませんでした。私語もできませんでした。

その後、VTRが発達し、ドラマを中継方式で収録することが試みられ、西田佐知子さん主演の「赤い鈴蘭」は吉武富士夫さん演出で、伊豆で収録されるこ

となりました。スタッフはスタジオセットが不用になるので経費は削減されると張り切っていました。しかし、中継車の移動費とそれに伴う人件費を考えるとたいした節約にならないのでは、と指摘すると睨み返されることもあり、いやな役でもありました。

異動の年、東京オリンピックが開催され、テレビの普及は一段と進み、全世帯の約70%、一千七百万台へと跳ね上がっていました。マラソン中継は圧巻でした。NHKの独占でしたが、10月の半ば、夕刻4時過ぎ、エチオピアのアベベ選手が国立競技場に走り込んできました。黙々と走るあの姿は感動ものです。やや遅れて日本の円谷幸吉とイギリスのヒートリー選手が現れ、大接戦の末、円谷選手は三位となりました。表彰式で掲揚された日章旗には胸打たれるものがあり、この臨場感はテレビの最大の魅力だと思いました。テレビは凄いな！

翌、昭和40年に始まった「木島則夫モーニングショー」は営業

的にも視聴率的にも不毛の時間帯と云われていた午前8時半からの番組で、浅田孝彦プロデューサーのもと栗原玲児さん、井上加寿子さんを加えた三人の息の合った進行は、前年の爆発的なテレビ普及の波に乗って見事、花開きました。未だテレビ局数が少ない時代、全国28局へネットされていた。司会者、制作担当者は幾人も替わりましたが57年間続いているこの番組はNETの誇りです。ここでも予算書作成に初回から関わっていました。毎日の取材先やゲスト出演者が代わる慌ただしい中、一週間分をまとめる作業は相当なものでした。

放送免許の大量交付

そして東日本放送へ

テレビの更なる普及促進のため、チャンネル・プランが当時の田中角栄郵政大臣の強力な指導のもと改正され、UHF帯域が大幅にテレビへ解放されて全国各地にテレビ局が急増してきました。その第三次プランによりNETテレビは仙台地区に新

局を設置することになり、東京・大阪・名古屋・九州・北海道・広島・仙台と全国基幹地区のネット網の展開を完成させました。昭和50年のことです。

制作局から経理局へ異動していた小生に、仙台への出向辞令が発令されました。経理部長職でした。当時の田中角栄内閣はロッキード疑惑などで退陣し、同時に発生したオイルショックによる急激な円安は物価の急激な高騰を招き、昭和49年から翌年にかけて景気は一気に減速、停滞していききました。あのトイレットペーパー買い占め騒ぎが起きた時期です。

そんな中、昭和50年10月、東日本放送は開局しました。まさに苦難の出発で、当初予定の設立規模は縮小に次ぐ縮小、とにかく電波送出が最優先とされました。銀行の貸出枠は厳しく規制されており、仙台に出店していた都市銀行、地方銀行、長興銀行など13銀行による協同融資でようやく最小限の必要資金が確保されました。その後の返済、利払いなど事務量の多

さと煩雑さは驚くばかりでした。開局時の体制は、役員、新卒者、他社からの転入者、関連会社の方々合わせて100名ほどでした。初めての諸作業は先輩NETテレビの応援を得て、つつがなく進みました。地区の後発局として先輩局に追い付け、追い越せの意地もあり、遮二無二、頑張っていました。初の市民マラソン大会を景勝の地、松島で開催したり、仙台市内の森林公園で約10万人の来場者を集めたフリーマーケットを行い、局の存在を大きく印象付けたものです。

この開局間も無い頃、小生にとつて思いがけない事がありました。夏の高校野球宮城県大会でなんとマイクを持ち、中継力メラに向かつて実況中継ならぬ実況報告を行ったことです。昭和51年から3年間行いました。ベテラン榎本猛アナウンサーのリードがあつたればの事です。冷汗三斗とはこの事、よくやったもの自身、呆れるばかりです。経理担当者として番組制作費の節約、削減を強く要請した結果、スタッフ不足となり、それを補うた

め狩り出された事でした。実況中継がこんなに難しいものだと実感させられました。

ニュース制作をめぐる

一時期(昭和47年～48年)、NET労働組合の執行委員を務めました。社が急速に成長する段階で、不都合な面や矛盾する部分が発生してくる事は致し方



昭和63年1月14日、仙台正月のどんと祭にて

ないと思っていました。その典型的なものが、NET構内にニュースを制作する同系列の他社が存在していた事です。同一取材先を両者が争い、放送はどちらかを採用するという無駄が生じていました。この不都合を解消するため、社はNET報道部員を構内他社へ出向させ、ニュース制作の一元化を計りました。部員

と労働組合は当然これに反発し、ストライキを構えて対峙しました。一年に及ぶストは、静かな本社玄関前に組合が設置したテントに指名ストを受けた報道部員他が徹夜で泊まり込み、加えて全国各地から各社の組合員が応援に駆け付けるなど、騒然とした雰囲気醸していました。この事態を憂えたNET組合員の約半数が打開に向けて直接行動をとるこ

とにし、小生を含む数人が執行部に参画しました。激しい討論の末、いったん、社の方針を受け入れ、全員の出向を認める事としました。若干強引さを感じてはいましたが。しかし、間もなく社の方針も変わり、系列社の報道部員を迎え入れ、NET社内報道局が新たに設置されました。組合活動・イデオロギーの何たるかを組合の中で争う気は全くありませんでした。社の発展途上に起こった先輩諸氏の試行錯誤の一端を問うたものであったと思っています。

終章

NETテレビ・東日本放送での46年間。漠然とした期待感から飛び込んだ世界でありましたが、年と共に成長していく姿は、局側の当事者としても目を瞠るばかりでした。一億総白痴化、電気紙芝居などの妬み節や揶揄を浴びた事もありましたが、万人に親しまれ、楽しまれ、情報に正確な伝達を確実に成し遂げてきたことは誇れると思っています。

これからはテレビ受像機を前に一家団欒の様式から、スマホでLINEなど個人単位の仕様になる事でしょう。しかし、基本は今までに培ってきた映像と音声の同時配信です。新たな世界が到来しつつあります。永きにわたったテレビ界での歳月は小生の全人生でした。関わったすべてに感謝しています。

水上健治 略歴

(みずかみ・けんじ)

●1962年(昭和37年)
日本教育テレビ(NET)入社

●1975年(昭和50年)
東日本放送出向 経理部長

●2003年(平成15年)
東日本放送 副社長

●2004年(平成16年)
常勤監査役

●2008年(平成20年)
退任